



武庫川女子大学女性研究者支援センター

〒663-8558 兵庫県西宮市池開町 6-46 武庫川女子大学 中央キャンパス内

TEL : 0798-45-3737 FAX : 0798-45-3535

Email : female_r@mukogawa-u.ac.jp



武庫川女子大学女性研究者支援センター

未来に向けてあなたはどんな進路を選びますか？



理想のワークライフバランス実現のために、
本校卒業の研究者の " 声 " を集めました

CONTENTS

03 学長あいさつ

学長（センター長） 糸魚川 直祐

プロジェクトリーダー
ごあいさつ

プロジェクトリーダー 福尾 恵介

04 ロールモデル集の
発刊に向けて

女性研究者推進支援室 横川 公子

05

独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所 特別研究員
井上 幸

07

武庫川女子大学
短期大学部 助教

設楽 馨

武庫川女子大学 文学部
心理・社会福祉学科 講師
三浦 彩美

09

高知県立療育福祉センター
発達支援部

11 宮内 砂緒里

武庫川女子大学 短期大学部
健康・スポーツ科学部
健康・スポーツ科学科
特別嘱託講師

13

新井 彩

国立スポーツ科学センター
スポーツ科学研究部
契約研究員

中村 真理子

15

デンマーク工科大学
室内環境・エネルギー国際研究所
留学中

水谷 千代美

17

武庫川女子大学 生活環境学部
生活環境学科 講師

古濱 裕樹

19

21

福井大学 教育地域科学部
准教授

村上 亜由美

神戸女子短期大学 食物栄養学科 准教授

本田 まり

23

25 木下 明美
大阪府立大学 総合リハビリテーション学類
栄養療法専攻 助教

神戸大学
自然科学系先端融合研究環重点部
研究部 助教

榎並 直子

27

29 松川 南海
武庫川女子大学 音楽学部
非常勤講師

29

松川 南海

武庫川女子大学
音楽学部 応用音楽学科 助教
竹原 直美

31

33

武庫川女子大学 薬学部
講師
吉川 紀子

ファイザーグローバル研究所
木本 絵美

35

37

九州保健福祉大学 薬学部
准教授
鳥取部 直子

神戸松蔭女子学院大学 人間科学部
ファッション・ハウジングデザイン学科 教授

徳山 孝子

39

41 理想のワークライフバランスと
研究を目指して——

45 研究者たちの座談会

女性研究者研究活動支援事業
選定機関一覧（女子大学）

46

47▶48

女性研究者支援センターの
取り組み概要


 ロールモデル集の発刊に向けて
 

本学は、文部科学省科学技術人材育成費補助事業「女性研究者研究活動支援事業」に採択され、現在、「若手女性研究者の自立と国際化を軸とした女性研究者支援のモデル開発」に全学を挙げて取り組んでおります。この事業に採択された国立・私立の女子大学は、これまで、本学を含め8校しかありません(平成25年度現在)。このように、本学の教育・研究の活動は高く評価され、女性研究者の育成について、一層の進展が期待されています。

女性研究者のみなさんは、育児、介護支援など、女性が直面するさまざまなライフイベントに対応しながら、研究生生活をやり遂げてこられた方々です。その経験は、研究者を目指す若い方々にとって、貴重な示唆と励ましを与えてくれるものと思います。

センター長(学長) 糸魚川 直祐

プロジェクトリーダーごあいさつ

研究には、iPS細胞に代表されるように、未知の課題に取り組み、得られた新しい発見や成果をもとに社会に貢献するという醍醐味があります。わが国では、研究に参加する女性が他の先進諸国に比べて非常に少なく、女性研究者の育成が大きな課題になっています。多くの女性が研究に参画し、さまざまな分野の研究に女性の視点が加わると、新しい着眼点から研究のさらなる発展や応用面においても新しい広がりが期待されます。

女性研究者支援センターでは、若手女性研究者の育成や研究者が出会いによって新たな繋がりや気づきが生まれるための仕組みづくりを進めていますが、活躍する女性研究者の姿を紹介することは、これらの目的達成のために非常に大きな力になります。このロールモデル集によって、女性研究者の新しい出会いが生まれるとともに、多くの学生が新しい気づきを得て、次世代の女性研究者を目指すきっかけになることを期待しています。

プロジェクトリーダー 福尾 恵介

本学の女性研究者研究活動推進事業は、平成24年度から、独立行政法人科学技術振興機構(JST)によって採択されており、創立80周年に向けた本学の取組を加速させるものとなっています。開学以来、本学は、有意の女性を社会に送り出すことを目指しており、理系の薬学部・生活環境学部にとどまらず、文学部・健康スポーツ科学部・音楽学部をも含む5学部13学科を視野に入れた、女性研究者の研究活動支援が推進されています。

ロールモデル集は、研究活動の緒についた若手研究者や研究を目指している大学院生、学部学生の水先案内になることを目的として編集された、現場で活躍されている研究者の体験や蓄積についての随想集です。第一号は、本学の学部や大学院を経て研究機関で活躍している方々のうち、身近なロールモデルになるとと思われる、比較的最近の卒業生を中心に掲載しました。

理系のみならず、女性が研究活動を継続していくには、ライフイベントとのバランスをいかに解決していくかが実際の課題になるし、そうした状況に絡むジェンダー的な価値意識もまだまだあって、それに対応していかなばなりません。研究すること自体には、一見、男女による差異はないようですが、男性研究者に伍して研究を進めるといふより、さらに質的な展開や広い視野からの取り組みが期待されていると思います。また女性は、そうしたことに柔軟に対応し実践していく力が優れているともいわれています。

現在は、科学に対する新しい期待が社会的にも高まっており、女性研究者の研究活動の追い風になっていると思います。今日のように、社会のなかに科学が入り込んでいるという経験は、人類史のなかで初めてのことです。そのため科学との付き合い方について、原子力の活用や防災に関する最近の経験を見ても、まだそれほど習熟していないともいえます。しかし、もはや、科学技術を使いこなすことなしに暮らしていくことはできません。

たとえば日本学会会議とJSTは、サイエンスカフェを現代社会における有効な科学コミュニケーションの一つとして全国展開しています。サイエンスカフェは、社会にとって科学がどのようなものであるかをみんなで考えるという運動です。JSTは、女性研究者研究活動推進事業を進めると同時に、科学技術の理解増進の一環として、専門家の視座のみでない地域社会の人々と密着した科学についての語らいの場を目指しているのです。女性研究者の可能性や将来性に希望が託されているといえます。既に80年も前になりますが、寺田寅彦は、科学(物理学)における素朴で質的な思いつきの重要性を繰り返し述べています。女性研究者が取り組むことができる研究活動の余地は非常に広いといえます。

現場で活躍する先輩研究者の蓄積や経験は、ライフイベントバランスについての知恵や工夫を導いてくれるばかりでなく、未来に向かう科学的課題に対して、貴重な示唆を与えてくれるものと確信しています。

女性研究者支援センター プロジェクト推進支援室長 横川 公子



手を止めない
少しずつでも
研究を続けて

で
いいから、
いく。

Researcher role models



武庫川女子大学大学院 文学研究科 国語国文学専攻 修士
独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 特別研究員

井上 幸

いのうえ みゆき

Q 進路のきっかけは何ですか

A 図書館のたくさん本、3年次の古代のゼミ、4年次の卒業論文で、研究の世界が、何かとても大きく圧倒されるものに感じながらも、自分の調べたいことが自由にできることがおもしろいと思っていたからです。そして、修士論文、博士論文を提出する度ごとに、懲りてももう少し続けてみたいと思ったからです。

Q 夢の実現に向かって努力したことはどんなことですか

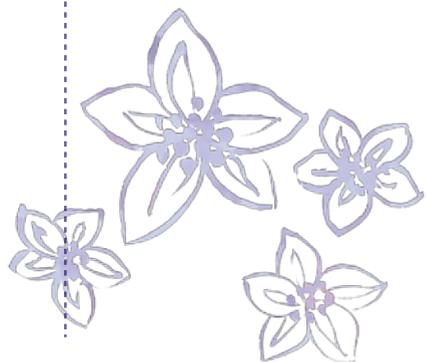
A 在学中は、目の前のことしか見えていなかったと思います。博士課程が終わってすぐに中国の大学へ日本語教師として赴任したり、帰国して進路を探ったり、今の仕事をする中で、研究を続けていくには、どんな状況にあっても、少しずつでもいいから、手を止めないことだと気がつきました。まずは中国で、現地の熱心な学生に負けまいと一念発起し、今も学生の時よりは頑張っているつもりです。また、責任感にあふれ、たくましく突き進んでこられたであろう現地の女性教員のみなさんにも、大きな驚きと深い感銘を受けました。とはいえ、怠け心もあって、研究と仕事と日常生活のバランスをとることは、至難の業と思っています。でも、バランスを欠けば、身体ももたないので、今後も元気に、楽しく毎日を過ごすことで、研究も続けられて、夢も膨らむので

はないかと思っています。

Q 何故今の研究分野が面白いと思えましたか

A 古代の文字使用に興味があり、特に調査対象としている正倉院文書や木簡は、後世の書写を経ない、当時のありのままの文字の姿を留めています。博士課程で正倉院文書に接し、そんな資料があることに衝撃を受けました。それは、指導教授が、“作品の成立年代と書写年代、(訓点資料の) 加号年代”について口酸っぱ

くおっしゃっていたことが、そこでやっと強い興味に変わったのだと思います。そして、今の職場に恵まれ、木簡にも数え切れないほどの多様な書き方があることを知り、一層興味がわいています。木簡が出土したその場所に職場があり、歴史学・考古学の研究者が集う場で、まさに門前の小僧として知識を蓄えているところです。まだまだ興味は尽きそうにありません。



■ 経歴

1976年8月 兵庫県生まれ
1995年4月 文学部国文学科入学
1999年4月～2004年3月 大学院文学研究科国語国文学専攻 (修士課程および博士後期課程)
2004年8月～2007年7月 中国・魯東大学外国語学部日本語学教授

2006年3月 博士(文学)学位取得
2008年4月～9月 摂南大学留学生別科非常勤講師
2008年10月～ 現職
2012年4月～ 奈良大学国文学科非常勤講師兼務

PROFILE



人との出会い 研究材料にも

が なる仕事。

武庫川女子大学大学院 文学研究科 日本語日本文学専攻 博士課程 修了
武庫川女子大学短期大学部 助教

設樂

馨

したら かおる

Q 進路のきっかけは何ですか

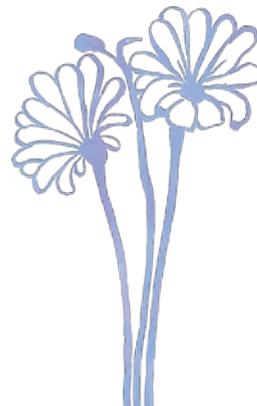
A 幼少期、「ゲンゴクシャ」というガ行音のたくさんある単語に何となく偉そうな雰囲気を感じました。後々、言葉をよく知っている人ということがわかり、あこがれを抱くようになったのがきっかけだと思います。

Q 夢の実現に向かって努力したことはどんなことですか

A 子どもころは「夢」より、周りの大人が喜びそうな将来を気にしていたように思います。そういう気兼ねをしなくなつてから、夢以外の進路で道草しないように努めています。

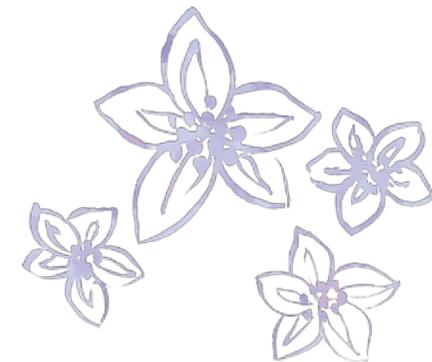
Q 何故今の研究分野が面白いと思えましたか

A 研究分野が面白いというのは、何故好きな食べ物がおいしいか説明するのに似ている気がします。おいしいから好きだし、好きだからおいしい。これだと回答にならないので、「おいしい」を重ねてもう少し考えてお答えしてみます。なじみの味だから→つい気になっていつも考えてしまうことだから。食べると幸せな気持ちになるから→自分の問題意識に関する事で気付いたことがあると、大変な発見でもしたかのよう
に知的好奇心が満たされるから。



Q 現在の仕事（研究生活）でのやりがい、楽しみは

A 研究者はもちろんですが、いろいろな偉い人・賢い人に会えます。会うと話が聞きます。どんな場面でどんなことをしゃべるのか、話の筋道の立て方、声の調節具合、人を引きつける話題の選び方など、気になります。それらは研究材料にもなります。現在の仕事は、人間観察をするゆとりがあること、観察するのについてつけの面白い人に出会えることという点で恵まれているように感じます。



■ 経歴

生まれは東京、父の仕事で小学生時代 3 年ほど福岡に住む。のびのび 3 年過ごして再び東京へ。都内女子校（わりと都会）から杏林大学（かなり田舎）へ。そこは八王子の山中、春は近隣の方が構内でタケノコ掘りにいそしみ、講義とともに郭公の声に聞き惚れ、夏は校名に因んで植えられたアズガが坂道を転がり、冬にはお腹を空かせたタヌキの親子に遭遇する。学士・修士など計 7 年ほど日本語を勉強、同時に四国や東北など日本各地の地域活性化を推進するシンクタンクでアルバイト

PROFILE

ト、そのうち「私に学者なんて…」と迷い、一般企業に勤務するも 6 ヶ月で進路転換、やはり専門を究めようと武庫川女子大学に在る佐竹秀雄先生を訪ねて西宮へ。武庫川女子大学大学院に入学後、附属中学・高等学校の非常勤講師をしつつ研究にいそむも博士論文が完成しないまま 3 年経過、本学助手の仕事を得て指導教官の指導も仰げる好環境に落ち着き、時間をかけて博士論文を提出、助教になり現在に至る。



この学問分野 研究の楽しさ 学生たちに伝

の魅力や を えたい。



武庫川女子大学 文学部 人間関係学科 卒業
武庫川女子大学 文学部 心理・社会福祉学科 講師

三浦 彩美 みうら あやみ

Q 進路のきっかけは何ですか

A 心理学を学び始めた頃は、臨床心理学を勉強してカウンセラーになろうと思っていました。しかし、大学で受講した授業をきっかけに社会心理学への興味・関心が高まり、人の心や行動の法則性を知ること、そしてそうした法則性を自ら見つけ出すことの面白さに目覚めていきました。大学院へ進学し、研究・教育の双方に携わるなかで、「大学教員になって、この学問分野の魅力や研究の楽しさを学生たちに伝えたい」と思うようになりました。



Q 夢の実現に向かって努力したことはどんなことですか

A 積極的にチャレンジし、常にベストを尽くすことです。母校の教員になるという夢への道のりは遠く、教壇に立つようになってからも実に多くの試練がありました。しかし、「教えることが好き」「学生が好き」という気持ちが、いつも試練をチャンスに変えてくれました。全てのチャンスを生かし経験を積むことが未来の自分につながると信じて、新しいことにも苦手なことにも積極的に挑戦し、その時の自分にできる最大限の努力をしてきました。それが、前進できたことへの確かな自信だけでなく、次のステップに進むための前向きなパワーを与えてくれたように思います。

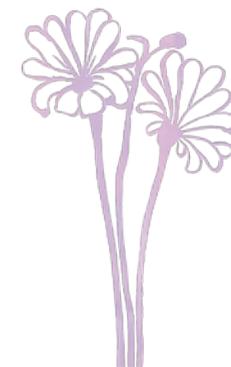


Q 何故今の研究分野が面白いと思えましたか

A 表情、視線、動作、声のトーン、空間行動などの非言語行動は、対人場面でやりとりされるメッセージの大部分を占めるといわれています。それほど大切な情報源であるのに、発信者本人による意識的なコントロールは難しく、そのため言語情報よりも正確に「本当の」考えや感情を相手に伝え(てしまい)ます。制御が困難であるからこそ、非言語行動には人間の心と行動のつながりがより分かりやすいかたちで表れるといえます。

コミュニケーション場面において、多様な非言語的メッセージはどのような法則にしたがって発信され、それは受け手にどのように解読されるのでしょうか。日々の

生活の中で身近に観察できる現象について、その法則性に新たな可能性を探ることは常にワクワク感を伴います。それがこの研究分野の面白さです。



■ 経歴

文学部人間関係学科卒業。神戸大学大学院総合人間科学研究科博士課程修了後、大阪大学大学院工学研究科、関西保育福祉専門学校での勤務を経て、2011年より現職。専門はコミュニケーション学(非言語行動)。

PROFILE



広い視野をも 地域に携わる 選びたかった

って 仕事を 。

武庫川女子大学 文学部 心理・社会福祉学科 卒業
高知県立療育福祉センター 発達支援部

宮内 砂緒里 みやうち さおり

Q 進路のきっかけは何ですか

A 大学時代は、「のちのち仕事探せばいいか」と実は怠けていたと思います。ゼミ担当の先生がそれに気づいてか気づかずか、「受けてみたら」と提案してくれたのがきっかけです。採用試験にチャレンジするかどうか、周りの人に相談するうちに、いろいろな思いがあることに気が付いていきました。その思いには、実習先のいろいろな施設職員の方々や当事者の方、子どもたち、大学の先生や友人との出会いが大きく影響していたと思います。実際に福祉現場で働くやりがいがある一方で、職員数や利用者の方の入退席の問題など、厳しい地域の現状もあります。そういった現状を見聞きしながら、もう少し前向きに考えられる社会にしていきたいと単純に思いました。今思えば、とても漠然としていましたが…。そのため、広い視野をもって地域に携わる仕事を選びたかったです。

Q 夢の実現に向かって努力したことはどんなことですか

A あまり思い浮かびませんが、とりえず資格試験や採用試験の勉強はしたと思います(笑)。それから、合格点が取れなくても、試験日が近づいて焦っても、そこで気持ちが落ち込んでいかにないように、大好きな甲子園に、そして日中一時支援にアルバイトに行きました。メリハリ、切替えは重要でした。つまり、勉強を理由にして“すきなこと”、“楽しいこと”を削らない!これは結構ミソです。『声をだす、体を動かす、仲間に会う、笑う。』今でも大切にしています。

Q 何故今の研究分野が面白いと思いましたが

A 私たちはどんな人も、地域で働き、暮らしていきます。現在は障害分野で仕事していますが、障害の特性は人それぞれです。彼らが安心して、できるだけ自立して

暮らしていくためにはどうしたらいいか。地域のどのの人に、どこの支援機関に頼もうか、どんな事業が必要かなど、いろんな人たちと試行錯誤します。まだ日々学んでいっているところではありますが、職場内でも指導をもらいながら、地域の専門職の人たちと一緒に取り組んでいます。その結果は教科書通りにいかないことも多く、予想外の展開を見せてくれることは、この仕事のおもしろさの一つです。

また、私たちとは違った感じ方や捉え方をする彼らの世界観が、私にとってとても貴重で、いとおしいと感じます。“おもしろさ”を正直に言うと、その世界観が覗けることかもしれません。

「福祉関係」「人対人などの仕事は、やりが

いはあるけどしんどい仕事というイメージがあるとされます。確かに、特別な仕事かもしれない。しかし私は、きっとどんな仕事でもそうなのかなと思ったりもします。電話、来訪してくれたお客さんにどんなサービスが提供できるか、足を運んだ得意先により満足してもらえるにはどうしたらよいか…対象や職務、目的は違っていても、それぞれ学びながらスキルアップし、経験を培っていくのだと思います。

でも私にこの仕事向いてるのか?次なる夢はなんなのか!?…考えているうちに、今やれることをまずはやってみて、たくさん失敗をしながら、いつかの自分の夢につながっていることを信じています。

■ 経歴

平成 19 年 3 月
土佐塾高等学校 卒業
平成 23 年 3 月
武庫川女子大学 文学部心理・社会福祉学科 卒業

平成 23 年 4 月
高知県立療育福祉センター配属 (至現在)

PROFILE



研究の面白さ、
研究者として
さらに見つけ

のやりがいを、
たい。



武庫川女子大学 文学部 教育学科 健康・スポーツ専攻 修了
武庫川女子大学短期大学部 健康・スポーツ科学部
健康・スポーツ科学科 特別嘱託講師

新井 彩 あらい あや

Q 進路のきっかけは何ですか

A 中学校から大学まで陸上競技を続け、大学では体育・スポーツを学問として学びながら競技のことを考える日々でした。高校の教員になりたいと思っていたのですが、どうすればもっと速く走れるのか？もっと高く跳べるのか？ということを追及したいという思いが芽生え、大学院への進学をきめました。

Q 夢の実現に向かって努力したことはどんなことですか

A 大学院を出てから、非常勤で働きながら研究と陸上競技に関わる日々が長く続きました。2004年から2011年の間は研究と並行して週1回の地域の陸上教室での子ども指導、2006年からは武庫川女子大学の陸上競技部で学外コーチとして現場での指導を続けてきました。時間を作って研究室へ通い続けました。どんなに苦しくても、自分自身のフィールドとしたい場との係わりを持ち続けるように努力しました。

Q 何故今の研究分野が面白いと思えましたか

A “スポーツバイオメカニクス”は、トップアスリートの動きから初心者の動きまで目を向け、選手が強くなるにはどこへ向かってトレーニングすれば良いのか？ということのヒントを見つけ出ししていくことができます。ダイナミックなスポーツ場面を生み出す人間の動きのメカニズムを追うことに面白さを感じています。

Q ワークライフバランスを実現していくために工夫・努力していることは？

A 普段は、授業やその他の業務、クラブ指導と研究との両立に苦戦しながら過ごしています。しかし、ON/OFFを切り替えて、全く違う世界観を感じに行く日を作っています。例えば、大学、研究といったことに関係のない世界で働いている友人と会う時間もその一つです。普段関わりのない情報に触れることはとても新鮮です。私は子どもの頃から、自分の興味あることにはしつこ

くらい掘り下げていくタイプでしたので、意図的にOFFを作ることをしないと疲れてしまいます。体力的にはなく、頭のスイッチを切り替える、ということを大切にしています。

Q 研究者を目指す（後輩）女性へアドバイスをお願いします。

A これから研究者を目指す女性へのアドバイスはうまく出来ません。何故なら、私は長く関わり続けてきたフィールドで、そこでの興味、追求したい思いが膨らんできたことで、結果的に研究者という道を選択しました。初めから研究者というポジションを意

識的に目指したわけではありません。もしかしたらその追求したい思いが“研究者を目指す”という方向だったのかもしれませんが。どのような入口であったとしても、自分の身を置きたいフィールドにどのように力を注げるか、ということが大切だと感じています。自分自身が研究者として未熟であり、これからもっと考え進んでいかなければならないと思っています。研究の面白さ、研究者としてのやりがいを、さらに見つけ出していきたいと思っています。

■ 経歴

1998年4月 武庫川女子大学文学部教育学科体育専攻 入学
2002年3月 武庫川女子大学文学部教育学科健康・スポーツ専攻（学科名称変更）卒業
2002年4月 大阪体育大学大学院博士前期課程スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 入学
2004年3月 大阪体育大学大学院博士前期課程スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 修了
2005年4月 大阪体育大学大学院博士後期課程スポーツ科学研究科

PROFILE

スポーツ科学専攻 入学
2008年3月 大阪体育大学大学院博士後期課程スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 単位取得退学
2004年4月～2011年3月まで 関西の大学や専門学校で非常勤講師（途中博士課程に在籍）
2011年4月～ 武庫川女子大学健康・スポーツ科学部健康・スポーツ科学科助手
2012年4月～ 武庫川女子大学短期大学部健康・スポーツ科学部健康・スポーツ科学科特別嘱託講師



「予防医学」と 研究し知見を 面白い分野。

という観点で 提供できる、

Researcher role models



武庫川女子大学 文学部 教育学科 体育専攻 卒業
国立スポーツ科学センター スポーツ科学研究部 契約研究員

中村 真理子

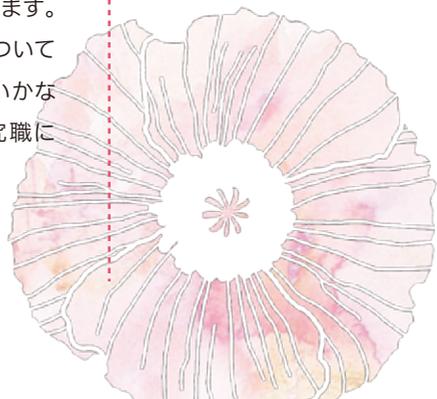
なかむら まりこ

Q 進路のきっかけは何ですか

A 大学1年次の運動生理学の授業内容が面白く、もっと専門的に勉強したいと思ったことが、一番初めに大学院進学を考えたきっかけだったと思います。また、大学当時サッカー部に所属していましたが、競技力向上に関するトレーニングなどについて知識と実践に乏しく、試合に向けてのコンディショニングの難しさも知りました。そんな中、運動生理学ゼミに所属し、当時指導教官が取り組んでおられた「女性アスリート」「運動パフォーマンス」などをキーワードとした研究テーマが非常に興味深かったのを覚えています。アスリートのコンディショニングについて研究して、その成果を活用できないかなという思いが次第に強くなり、研究職に興味を持ち、進学を希望しました。

Q 夢の実現に向かって努力したことはどんなことですか

A 特には思いつきませんが……。大学卒業後の1年間、アルバイトをしながら大学院進学のための準備をしたことでしょうか。その後大学院入学、修了、就職、編入、修了と学位取得までに時間はかかりましたが、今思えば、あの1年間がなければ今の自分はないと思います。大学院進学、編入後は、大変なことも多かったですが、非常に良い仲間恵まれたので、お互い助け合い、刺激し合いながら現在まで研究に携わることができています。



Q 何故今の研究分野が面白いと思えましたか

A スポーツ医学という研究分野は、各専門医や医療に従事する専門職スタッフ、トレーナー、研究者など様々な専門職の方々が各専門分野から追求する学問領域です。運動が心身に与える影響について研究することはもちろんですが、運動をすることで疾患や障害・外傷を予防できる「予防医学」という観点から研究し知見を提供できる、非常に面白い分野だと思います。また、これまで自分が取り組

んできた「循環」「運動」「女性」というキーワードをテーマにした研究成果は、アスリートばかりではなく、全年代の女性の健康の維持増進に役立つ知見に繋がる可能性があるというところが非常に面白いと感じています。



■ 経歴

1998年 武庫川女子大学 文学部 教育学科 体育専攻 卒業
2001年 筑波大学大学院 修士課程 体育研究科 スポーツ健康科学専攻 修了
2001年～2006年 武庫川女子大学 助手
2006年～2009年 大妻女子大学 非常勤講師
2007年 産業技術総合研究所 テクニカルスタッフ

2008年 慶応義塾大学 非常勤講師 (現在に至る)
2009年 筑波大学大学院 博士課程 人間総合科学研究科 スポーツ医学専攻 修了
2009年 国立スポーツ科学センター スポーツ科学研究部 契約研究員 (現在に至る)

PROFILE



高齢者たちの 喜ぶ姿が 今の私の研究

の糧

Researcher role models

武庫川女子大学大学院 家政学研究所 被服学専攻 博士後期課程 修了
デンマーク工科大学 室内環境・エネルギー国際研究所 留学中

水谷 千代美 みずたに ちよみ

Q 進路のきっかけは何ですか

A 進路のきっかけは、卒業研究が非常に興味深く、もう少し追及したいと思ったことです。

仮説を立てて実験し、結果を出し、仮説が成立したことに魅了されました。今も同じように実験に動んでいます。

Q 夢の実現に向かって努力したことはどんなことですか

A 英文の研究論文を読んでいくうちに、海外で研究したいという夢を持ちました。そのために、日頃から海外のニュースや新聞や英文の研究論文を読むように心がけました。周りの支援を得て平成9年から約1年間、米国農務省南部地域研究所で綿繊維の酵素処理について研究しました。平成25年現在、消臭抗菌繊維の消臭効果を調べるために、デンマーク王国デンマーク工科大学で研究に励んでいます。

日頃から努力し、夢をあきらめなければ、望みは必ず叶うと思います。

Q 何故今の研究分野が面白いと思えましたか

A 私の研究テーマは、消臭抗菌繊維を中心とした機能性繊維を医療・介護用品へ応用してその効果を調べることです。高齢化が進む我が国では、寝たきり高齢者数が非常に多く、終日ベッドで寝ているために、臭いや高齢者の皮膚疾患が大きな問題となっています。消臭抗菌繊維を介護用品に展開して高齢者施設で臨床



テストを行った結果、悪臭は消えて無臭になり、高齢者の皮膚疾患が治癒するということがわかりました。高齢者施設での臨床テストは、施設の現状や高齢者の様子が把握でき、我が国の抱える問題点を目の当たりにしました。臨床テストの成果によって、高齢者たちの喜ぶ姿が今の私の研究の糧となっています。研究成果が人に有益で、人や社会に役に立つ仕事をするのが今後の目標です。



■ 経歴

学歴

昭和54年3月 兵庫県立北条高等学校卒業
昭和58年3月 武庫川女子大学家政学部被服学科卒業
平成6年3月 武庫川女子大学大学院家政学研究所被服学専攻博士後期課程修了 博士(家政学)
平成25年9月 信州大学大学院総合工学系研究科総合工学系研究科生命機能・ファイバー 専攻修了・博士(工学)

職歴

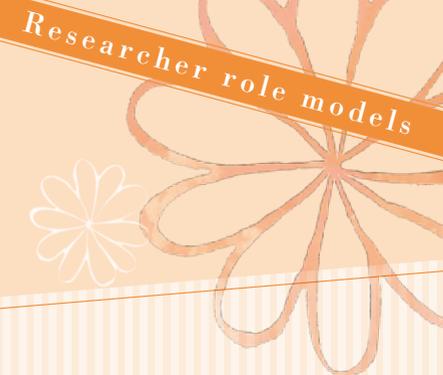
平成6年3月～平成12年3月 武庫川女子大学生活環境学部生活環境学科助手
平成9年8月～平成10年9月 米国 Southern Regional Research Center 留学
平成12年4月～平成14年3月 平安女学院短期大学生活学科衣生活専攻助教
平成14年4月～平成17年3月 平安女学院大学生活環境学部生活環境学科助教
平成17年4月 大妻女子大学家政学部被服学科准教授(現在に至る)
平成25年 デンマーク工科大学室内環境・エネルギー国際研究所留学中

PROFILE



きっかけは、
葛で染めた緑
惹き込まれ感

色の美しさに
動したこと。



武庫川女子大学大学院 生活環境学研究科 生活環境学専攻 博士後期課程 修了
武庫川女子大学 生活環境学部 生活環境学科 講師
武庫川女子大学短期大学部 生活造形学科 講師

古濱 裕樹 こはま ゆうき

Q 進路のきっかけは何ですか

A 高校時代は勉強法が定まらず酷い成績でした。大学進学1年前に勉強スタイルを見つけ、真面目に勉強しました。成績上昇途上でもあり、大学合格時も「もう一年浪人しよう」と考えたのですが、高校の先生の薦めで、入学し何事にも頑張ろうと決心しました。学科で学べる全分野に加え、教職課程も履修しました。琵琶湖畔の恵まれた環境の大学で授業も楽しく体育会系部活にも励み、充実した日々でした。しかし、2回生で挫折、昼夜が逆転し、年10単位程しか取れませんでした。厳しくも温かい言葉をかけてくれる学友は課題にも遊びにも真剣、夢を語り、輝いていました。ここで入学時の初心に戻りました。卒論は被服科学を目指し、それに関する授業は全て満点をとると念じ、卒業に関係のない工学部の授業にも潜り込みました。最終的には卒業要件を軽く越える単位に教員

免許も取得しました。大学入学時の意欲と3、4回生時の勢い、それが「自分はまだ限界には到達していない。限界が見えるまで昇り続けたい。」との信念に繋がったのかと思います。

Q 夢の実現に向かって努力したことはどんなことですか

A 院の研究室では先生のお言葉がきっかけで、月～土曜日は毎日9時半から18時半まで規則正しく過ごしました。武庫川女子大学に漂う緊張感も良かったのでしよう。お陰で「時間を考えて実験を計画し、予定通りに終わらせ、結果や考察を纏め、次の計画を練る」を繰り返す毎日を過ごし、実験は自ずから進み、実験ノートは日々厚みを増しました。

Q 何故今の研究分野が面白いと思えましたか

A 天然染料染色は人類の基本的な営み

にも関わらず、解っていないこと、非科学的な話が多く、それらを現代科学の眼で解明することに魅力を感じます。そもそものきっかけは、大学時代、採取した葛で染めた緑色の美しさに惹き込まれ感動したことです。

Q 院生、および院を目指す人へ

A 院進学目的が学位取得という人が多いですが、学位は必ずしも将来に有利だと

は限りません。私は、好きな学問分野の研究をする目的で進学する人が好きです。私は武庫川女子大学大学院に第一志望で進学しました。学歴ロンダリングつまり有名国立大の院に進む選択肢は、天然染料染色の研究ができそうにないため早々に候補から外しました。院は、偏差値など無く、好きな研究を適した環境で熱心に取り組む場所です。また自分の研究の魅力を後輩に伝えることも院生の重要な役割です。

■ 経歴

2001年3月 滋賀県立大学 人間文化学部 生活文化学科 卒業
2001年4月 武庫川女子大学大学院 家政学研究科 生活環境学専攻 修士課程 入学
2003年3月 同上 修了 (家政学)
2003年4月 武庫川女子大学大学院 生活環境学研究科 生活環境学専攻 博士後期課程 入学
2006年3月 同上 修了 博士 (生活環境学)

PROFILE

2006年4月～2009年3月 武庫川女子大学 生活環境学部生活環境学科非常勤助手
2009年4月～2012年3月 神戸松蔭女子学院大学 人間科学部 生活学科 都市生活専攻 専任講師
2012年4月～現在 武庫川女子大学 生活環境学部生活環境学科 講師
(その他) 非常勤講師として 京都造形芸術大学、大手前大学、大手前短期大学、神戸山手短期大学、上田女子服飾専門学校



食品の機能性
新しい知見に
とても面白い。

について
触れることは、

Researcher role models



武庫川女子大学 家政学研究科 食物学専攻 修了
福井大学 教育地域科学部 准教授

村上 亜由美 むらかみ あゆみ

Q 進路のきっかけは何ですか

A 学部、大学院修士課程と家庭科教員養成課程で食物学を中心に勉強しましたが、最初に職業として選んだのは、プロセスコンピューターのソフトウェア会社でのエンジニアでした。未経験の仕事必死で覚える中で、職業人としてプロのレベルを要求されるということや、仕事というのは膨大な時間を費やされるのだ、と

いうことを身をもって経験しました。それならばもっと直接、好きな食物に関わる専門性の高い仕事をしたいと思うようになり、食物学を専攻する博士課程で勉強し直すことにしました。

Q 夢の実現に向かって努力したことはどんなことですか

A わたしは、幸せなことに、これまでご指導いただいた先生方に恵まれました。常に心がけてきたのは、ご助言・ご指導いただいたことを、素直にかつ真摯に受け止め、そして自分の考えにしてから、実行するようにしてきました。

Q 何故今の研究分野が面白いと思いませんか

A 現在、家庭科教員養成に携わっているのですが、栄養学、食生活学、調理学と広い領域でもって研究に取り組んでいます。共通しているのは、おいしく食べて健康

になることです。おいしく食べることは、そこに必ず他者との関わりがあり、人を幸せにします。プロの料理人の鮮やかな調理技術を見せてもらうのが好きで、もちろん食べるもの好きなのですが、その技法の調理性について考えることや、その料理をいつ、誰と食べるのか、そして体の中ではどんな働きをするのか、食品の機能性について新しい知見に触れることなど、とても面白く感じています。

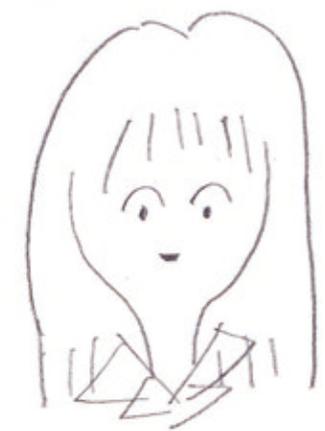


■ 経歴

1989年 神戸大学教育学部中等家政科卒業
1991年 神戸大学教育学研究科家政教育専攻修了
1991～1992年 日本プロセス株式会社勤務
1997年 武庫川女子大学家政学研究科食物学専攻修了

1997～1999年 武庫川女子大学生活環境学部食物栄養学科助手
1999～2000年 甲子園短期大学講師
2000年～現在 福井大学教育地域科学部准教授。

PROFILE



患者様のため
栄養食事指導
もっと勉強し

になる
とは何なのか、
たいと、進学を決意。

武庫川女子大学大学院 生活環境学研究所
食物栄養学専攻 博士後期課程 満期退学
神戸女子短期大学 食物栄養学科 准教授

本田 まり
ほんだ まり

Q 進路のきっかけは何ですか

A 大学卒業後は、病院の管理栄養士として数年間働いていました。私が管理栄養士として初の採用だったこともあり、行政への新たな手続きや栄養管理上の改善など、新卒で経験のない管理栄養士の私にとって難題の山でした。地域の管理栄養士の先輩方や医師、看護師、調理員等のアドバイスを受けつつ、ひたすら調べては仕事をこなす日々でした。そのような中、主に糖尿病や腎臓病患者様を中心とした栄養食事指導業務に携わることが多くなり、これを進めていくうちに、本当に患者様のためになる栄養食事指導とは何なのか、もっと患者様のからだのことをよく理解しなければ…という思いや、効果的な栄養食事指導の方法についてもっと勉強をしたいという思いが募り、進学を決意しました。今思うと、決意には周囲の方々の後押しも大きかったと思います。当時の

Q 方々への感謝を忘れることはありません。

A 私の夢が何であるかは実はまだわかりません。ただ、自分は管理栄養士になったのだから、その職務として人の役にきちんと立ちたいという強い思いがあります。そのために自分に出来ることは何なのか…を常に考え、前を見据えながら今も試行錯誤の日々を送っています。まだまだ無知で未熟なところが沢山あります。そのため周囲の人々から助言を受けることも大切で、そのことを自分なりに考え、そしてチャレンジする（努力する）ことが大切かと思えます。努力していることは、毎日の時間を大切にし、何をするのか、その積み重ねです。

Q 何故今の研究分野が面白いと思えましたか

A これまで述べてきた自分の思いが自

然に研究分野になりましたので、面白くないわけがありません。栄養食事指導支援システムの構築に関する研究の中では、より効果的な栄養食事指導の手法について糖尿病患者様を対象に検討しましたが、この研究を通して、研究計画の立案や評価、研究論文の作成など、研究という一連の基本的な流れについては勿論、物事の色々な見方、考え方を学ぶことができ、自分にとって大きな財産になったと思えます。これら数多くのことは、以降の管理栄養士としての職務に生かされ、現職の学生教育や社会活動のベースにもなっていると思えます。ここでもお世話になった先生方や友人、家族など多くの人々への感謝を忘れることはありません。

Q 研究者を目指す（後輩）女性へアドバイスをお願いします。

A 元々、男女共に外で遊ぶ快活な子どもであったと思いますが、高校生の頃は人を直接の対象としない職に就きたいと、ぼんやり思っていました。が、結局は人の役に立ちたいと思うようになり、また多くの人に支えられてここまでやってこられたように、人との関わりが大切だと思えます。研究者を目指す皆様方、辛いことも沢山ありますが、得られるものは大きいと思えます。とにかく共にがんばりましょう！そしてネットワークを広く持つことも大切かと思えます。もしも連携して研究できそうなことがありましたら、お気軽に声をお掛け頂ければ…と思えます。

■ 経歴

武庫川女子大学大学院 生活環境学研究所 食物栄養学専攻 博士後期課程（満期退学）
 武庫川女子大学 生活習慣病 オープン・リサーチ・センター 博士研究員、医療法人 斎寿会 鈴鹿回生病院 健康管理センター係長・ヘルスフード相談室室長などを経て、神戸女子短期大学 食物栄養学科 准教授（現在に至る）
 生活環境学博士、糖尿病療養指導士、病態栄養専門師

PROFILE



この手も足も 食べ物で出来 ているのです

武庫川女子大学大学院 家政学研究所 食物学専攻 博士後期課程 修了
大阪府立大学 総合リハビリテーション学類 栄養療法学専攻 助教

木下 明美 きのした あけみ

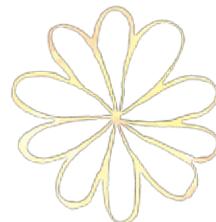
Q 進路のきっかけは何ですか

A 実験系の研究分野を選んだきっかけは、何と「白衣が格好いい」「白衣を着たい」でした。こんな理由で進学先は白衣を着ることができそうな学部になりました。いよいよ学部4年生になり就職活動に奔走しなければならない時期に、卒業論文の指導教官から「これからの時代は女性も大学院に行くべきだ」とのお言葉をいただき、私の心にすんなりと入り共鳴しました。研究者としての素養があるかどうかわからない。だから大学院に行ってみようかと大学院進学を決めました。大学教員になった今でもその答えはでていませんが。

Q 夢の実現に向かって努力したことはどんなことですか

A 何かヒトの役に立つことが夢です。大学の2本柱は教育と研究です。教育においては学生が社会へ旅立ち、社会での

活躍が私の成果であり、夢の実現ということになります。ただこの成果は10年後、20年後と直ぐにはでないので気長に待つしかありません。次に研究における夢の実現です。何事も独りできることは限られてきます。人脈が私にとっての財産です。行き詰まっている時、苦しんでいる時など困っている時に、母校の先生方を訪ねてみます。叱られたり、励まされたり、時には黙って話を聴いていただいたり、アイデアいただいたりします。これが大事なのです。ヒトは弱いもの。誰か仲間が必要です。ですからどんどん足を運んで色々な尊敬する研究者に会ってください。先輩の研究者はたくさんの引き出しを持っていらっしゃることでしょ。きっと心の栄養となるはずですよ。



Q ワークライフバランスを実現していくために工夫・努力していることは？

A 普段、大学では研究の成果として研究論文の量や質を求められています。研究をしなければならない、論文を書かなければならない。その上、雑務で日々締め切りに追われています。その結果、長い間、ワークライフバランスをとらず、「ワーク」のみの生活をしてきました。初めのうちはそれで良かったのですが、結局、思考の柔軟性がなくなってきたような、心に潤いがなくなったような感覚を覚えました。現在は休みの日は仕事のことは考えずにのんびり過ごしています。サプリメントアドバイザー、アロマセラピーアドバイザーの資格を取ったりしています。もちろん趣味程度です。

■ 経歴

京都府立大学大学院食生活科学専攻修士課程修了
武庫川女子大学大学院家政学研究所食物学専攻博士後期課程修了

Q 何故今の研究分野が面白いと思いましたが

A 大きく捉えると、私の研究は「食べ物と健康」という分野になるでしょうか。管理栄養士養成の大学を渡り歩いたせいか必然的にこの分野がテーマとなりました。ヒトを作っているのは、食べ物です。生かすも殺すも食べ物なのです。長寿国といえども、できれば健康で長生きが理想です。毎日かかわる食べ物です。我々から切り離して考えられない存在です。この手、この足、全て食べた物で構成されていると考えると、私の興味は自然と「食べ物と健康」に向きます。



PROFILE



きっかけは
「空気を読め
出来ないだろ

る機械が
うか？」から。

Researcher role models



武庫川女子大学 生活環境学部 情報メディア学科 卒業
神戸大学 自然科学系先端融合研究環重点部 研究部 助教

榎並 直子

えなみ なおこ

Q 進路のきっかけは何ですか

A 大学入学前までは自分は文系人間だと思っていました。ですが、情報メディア学科の野村典子先生の指導のもと取り組んだネットワークアプリケーション開発で物作りの楽しさと「わからない」が「わかる」に変わる喜びを知り、技術者を目指しました。その後、企業ではエンベデッドシステムの開発に携わっていましたが、自分の手で「面白い」を形にしたい。また自分自身の新たな可能性を広げることができたきっかけとなった大学教育に興味を持ち、大学で研究者となることを決めました。

Q 夢の実現に向かって努力したことはどんなことですか

A 現在の研究分野は企業時代とは異なる分野でしたので、大学院進学のために基礎から全て勉強し直しました。仕事をしながら勉強時間を確保することは難しかったですが、週ごとにスケジュールを立てて取り組むことで乗り切りました。



Q 何故今の研究分野が面白いと思えましたか

A 空気を読める機械が出来ないだろうか?と考えたのが、この分野に興味を持ったきっかけです。たとえば、人は表情や仕草から人の気持ちや考えを推し量ることが出来ます。同じように人からの入力を待つのではなく、機械が人の気分や状況に合わせて自律的に動くことができれば、知識がなくてもシステムを利用できます。そのために、機械の目となるカメラから得られた画像を解析することで、様々な情

報を認識・推定する現在の研究テーマをはじめました。



■ 経歴

2004年3月
武庫川女子大学 生活環境学部 情報メディア学科 卒業
2008年3月
奈良先端科学技術大学院大学 情報科学研究科 情報処理学専攻 博士前期課程 修了
2011年6月
奈良先端科学技術大学院大学 情報科学研究科 情報処理学専攻 博士後期課程 修了
取得学位 工学博士
2004年4月～2006年3月
東芝情報システム株式会社 第一エンベデッドシステム事業部

2010年4月～2011年12月
日本学術振興会特別研究員
2010年4月～2011年10月
武庫川女子大学生活環境学部 非常勤講師
2011年6月～2011年12月
株式会社国際電気通信基礎技術研究所 社会メディア総合研究所 石黒浩特別研究室 連携研究員
2012年1月～現在
神戸大学 自然科学系先端融合研究環重点部 研究部 助教

PROFILE



ピアノ以外へ 広い視野で物 自信・音楽の

の関心、 を見る努力が 表現につながる。

武庫川女子大学 音楽学部 卒業
武庫川女子大学 音楽学部 非常勤講師

松川 南海 まつかわ なみ

Q 進路のきっかけは何ですか

A 音楽大学を卒業した叔母の影響もあり、4歳のときからピアノは習っていました。小さいときから親に連れられて演奏会を聴きに行ったり、叔母がピアノを弾いているのをよく聴いていたり、常に音楽が身近な存在であったというのは大きいかなと思います。2年ほどピアノから離れていた時期もありましたが、やはり、どうしてもやめられなかったこと、自分にとって誇れるものは何かと考えた時にそれがピアノであったことが今に繋がっていると思います。そして私にとって人との出会い、恩師との出会いも進路を決める大切なきっかけになりました。いろいろな人に出会い、助言をいただき、自分の進みたいと思う道に更なる方向性を示してもらえた事で今の私があると思います。

Q 夢の実現に向かって努力したことはどんなことですか

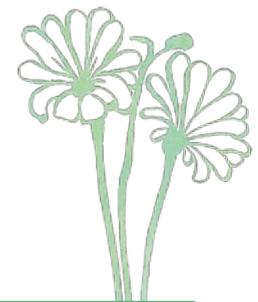
A これは未だに努力しているのですが、専門分野以外のこと、つまりピアノ以外のことにも関心を持つこと。広い視野で物を見ることです。学生の間は与えられた課題をこなし、それに伴う音楽の勉強をしていただけで、専門はピアノなのだからとにかくピアノを練習して、少しでもストレスになることを避け、他のことに労力や時間を使わないようにという考えでした。それで出来るのは、自己満足だけの、特に魅力も無いただの知識の偏った人で、そんなキャパシティの小さい人に、人を魅了するような良い演奏ができるわけもなく、結局その先に待っているのは行き詰まりだけです。音楽だけにどっぷり浸かるのではなく、いろいろなことを自分で体験して、辛いことも、時にはやりたくないことも興味がないなと思うことも頑張ってみると、意外と

それが自分の自信になっていたり、その時は反映されなくても後々、必ず自分の経験値となってプラスに働いてくれます。もちろん他の事に一生懸命すぎて、自分が潰れてしまっただけの本末転倒ですが、たくさんの人と接して色々なことを得ることで自分の中の引き出しを増やしていくことが結局音楽を表現することにも繋がって大切なことなのかなと思います。

Q 何故今の研究分野が面白いと思えましたか

A 私はピアノが専門ですが、ピアノという楽器は一度にたくさんの音を鳴らすことの出来る唯一の楽器で、例えばオーケストラの曲を編曲しピアノ一つで演奏するこ

とも出来ます。単音から重音に広がる響きの魅力。そして、誰にでも簡単に音を出せる楽器であるのに、60年も70年もピアノを弾き続け、素晴らしい演奏をしているたくさんのピアニスト達が、ピアノを弾くことに終わりは無いといって一生を捧げている。その奥の深さにとても魅力を感じます。これからもピアノを勉強し続け、一人でも多くの人にピアノの魅力を伝えて行けたらと思います。



■ 経歴

PROFILE
 堀川高校音楽科、武庫川女子大学音楽学部卒業、ドイツ国立デトモルト音楽学校ミュンスター校芸術課程修了。全日本学生音楽コンクール大阪大会入選。日本ピアノ教育連盟オーディション優秀賞。日本、ヨーロッパ各地で音楽祭、演奏会に出演。



音楽を通して 学生の笑顔と 何よりの喜び。

子供たちや 成長を見届けることが



武庫川女子大学 音楽学部 声楽学科 (音楽療法コース) 卒業
武庫川女子大学 音楽学部 応用音楽学科 助教

竹原 直美 たけはら なおみ

Q 進路のきっかけは何ですか

A 音楽を通して出会った多くの方々に今の進路を選ぶきっかけをいただいたと実感しています。励ましの言葉や、握り返してくださった手の温もり、優しい表情、交わした音や手紙の一節を思い出すと、この進路で頑張ってみようという気持ちが湧き上がってきます。

Q 夢の実現に向かって努力したことはどんなことですか

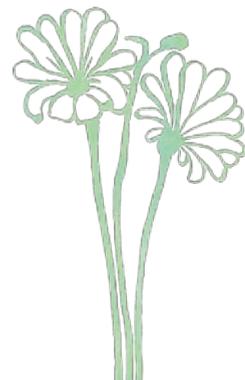
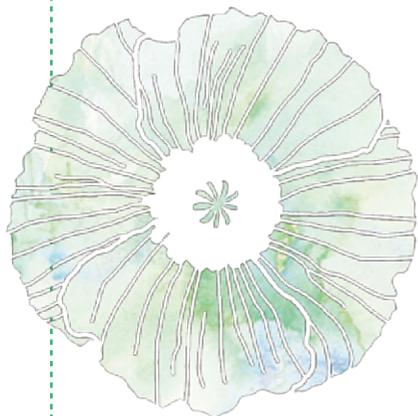
A 現場での臨床研究を継続してきたことです。施設・病院での音楽療法・演奏のボランティアから、文化センター・音楽教室・幼児教育施設の仕事、短大・専門学校での教育活動など多様な経験を積みました。新しい場への挑戦は不安や失敗も多く、苦い思い出もいっぱいありますが、各々の現場で個々に必要とされる音楽療法の働きを考え実践する中で、音楽の意味や役割を深く知る経験ができたことは、夢に近づくための大切なあゆみでした。

Q 何故今の研究分野が面白いと思えましたか

A 一番は、子供たちや学生の笑顔や成長を見届けることができることです。音楽を通して自由に生き生きと表現のできる時間を共有できた時は、何よりの喜びを感じます。昔から何事にも時間のかかるタイプ、空想することや芸術的な作業が好きだったので、気づくと居残りをして作品に夢中でした。そんな姿を先生が面白いと見守ってくださったこと、それがセラピーや研究の原点です。今でも心が落ち着かなくなるとアトリエにいき、詩や絵・ステンドグラスの作品づくりをします。不思議なことに、芸術的な作業をしている

と思わぬところで研究のアイデアが湧くことも!!そして、心のリフレッシュは、子供たちと素直な気持ちで臨床に向かうための大切な作業となっています。

最後に、音楽療法は新しい研究分野であり、誰も経験したことがないテーマに挑戦していくことができることも魅力です。音楽に関わる実験や分析をする過程も楽しく、関連分野の学生や研究者と学際的な研究に取り組んでいます。常に新しい気づきや発見が生まれる臨床研究の現場で、知識や経験が生かされてゆく瞬間に携わることができること、これは日々感動的な体験の連続です。



■ 経歴

武庫川女子大学音楽学部声楽学科 (音楽療法コース) 卒業。同志社大学大学院文化情報学研究所博士課程前期、後期課程修了。博士 (文化情報学) 取得。日本音楽療法学会認定音楽療法士。本学の音楽療法研究室にて様々な悩み・障がいのある子どものための音楽療法に従事し、音楽の科学的・感性的な働きに注目した臨床研究・教育・演奏活動を行っている。

PROFILE



転機が来たら 迷ったら前に

チャレンジ、 進む。

武庫川女子大学大学院 薬学研究科 博士課程前期 修了
武庫川女子大学 薬学部 講師

吉川 紀子 よしかわ のりこ

Q 進路のきっかけは何ですか

A 大学に入学したときは、研究者になりたいとは思っておらず、卒業したら薬剤師になろうと思っていました。しかし、卒業研究のために大学3回生で薬理学I研究室に所属し、実験を行っているうちに、楽しさを感じ、もっと研究したいと思うようになりました。初めて細胞培養を行った次の日は、“ちゃんと細胞育っているかな？”とドキドキしたのを今でも覚えています。また、実験を進めながら、最新の英語論文を読んでいるうちに、これまでずっと遠いものだと思っていた“世界に広がる最先端のサイエンス”を、今、自分が研究をしているすぐ向こう側に感じる事が出来ました。さらに、“仮説を立て、実験をして検証し、論文にまとめ、発表する”という、このクリエイティブで、地道なコツコツとした作業が好きだったのも、研究者の道に進んだきっかけの一つです。

Q 夢の実現に向かって努力したことはどんなことですか

A 研究者になって、海外で研究してみたいと思っていましたので、英語の勉強は、コツコツと続けていました。製薬会社、大学助手、

アメリカでの博士研究員を経て現在に至りますが、さらにステップアップするためには、まだまだ精進が必要です。現在は英語力の他に、人間としての総合力を高めること、および研究に対するモチベーションを高く保つように努力しています。“あれは無理”とか“これは無理”とか考えずに、その時々で自分の興味に基づいた悔いのない選択をし、選んだ場所で最大限の努力をするようにしています。そして、転機が来たら、チャレンジするようにしています。私自身は、“迷ったら前に進む”ことを選択し、それで今まで何とかなってきましたし、いざ進んでみると色々な苦労もありますが、いつも想像したよりずっと楽しい世界が待っていました。

Q 何故今の研究分野が面白いと思えましたか

A “様々な抗がん剤があるのに、何故がんは治せないのか？”世界中の多くの研究者が、がんの研究を行っており、がんについて様々なことが明らかになってきましたが、まだ、がんは完治する病気にはなっていません。さらに、がんの治療を困難にしている大きな要因の一つは、がんの転移です。そこで、がんの転移に興味を持ちました。私の研究成果が、少しでも新しいがん治療法および

新しい薬の開発に寄与できればと思っています。

Q ワークライフバランスを実現していくために工夫・努力していることは？

A 正直なところ、まだ、ワークライフバランスは上手にコントロール出来ていません。アメリカで博士研究員をしていた頃、周囲の研究者は、ワークライフバランスを上手にコントロールし、研究はもちろん、充実した私生活を送っていました。現在は、月曜日から土曜日は、ほぼ全ての時間とエネルギーを仕事に費やし、日曜日のプライベートな時間を確保するように努力しています。

Q 研究者を目指す(後輩)女性へアドバイスをお願いします。

A 私は、研究者に必要なのは、“研究に対する熱い思い”と“体力”だと思います。研究者は、とてもやりがいのある魅力的な仕事なのですが、不安定なポジションが多く、将来のことを考えると不安になることもあります。実際、私も、将来のポジションのことや、研究と出産・育児の両立など、いくつかの不安を抱えています。しかし、継続することが大切だと思います。その時、その時、最大の努力をしていけば、必ず次の道は開けます。失敗を恐れずに自分を信じて、あなたの道を突き進んで下さい。

■ 経歴

| | |
|--|--|
| <p>1996年 武庫川女子大学薬学部入学</p> <p>2000年 武庫川女子大学薬学部生物薬学科卒業(薬理学I研究室)</p> <p>2002年 武庫川女子大学大学院薬学研究科博士課程前期修了(薬理学I研究室)</p> <p>2002-2003年 株式会社藤本創薬研究所 研究員(薬効解析I)</p> <p>2003-2009年 武庫川女子大学薬学部助手(薬理学I研究室)</p> <p>2009-2012年 アメリカ国立衛生研究所(NIH) 国立がん研究所(NCI) 博士研究員</p> | <p>2012年 武庫川女子大学薬学部講師(薬理学I研究室) 受賞</p> <p>2006年 第15回国際薬理学会 Natural Products Young Investigators Award, The Second Prize</p> <p>2006年 第2回生活習慣病国際シンポジウム Young Scientist Award, Gold Prize</p> <p>所属学会 日本薬理学会学術評議員、日本薬学会会員、アメリカ癌学会会員</p> |
|--|--|

PROFILE



アメリカで研 患者さんに貢

究者として 献しています。

武庫川女子大学 薬学部 生物薬学科 卒業
ファイザーグローバル研究所

木本 絵美 きもと えみ

Q 進路のきっかけは何ですか

A 薬を飲むのも使うのも抵抗があった私が薬学部を選ぶきっかけになったのは、薬は使い方次第で副作用を最小限に抑えられて患者さんにとって有効な治療薬となる、と知った事です。『なぜ副作用が起こるのか』そのメカニズムにとっても興味を持ち、薬そのものを作る段階から関わり、より安心して使える薬を世の中に届けたい、という思いが強くなり、企業での研究を選択しました。所属していた研究所閉鎖を機に、米国コネチカット州にあるファイザーグローバル中央研究所に転職し、創薬研究に携わっています。

Q 夢の実現に向かって努力したことはどんなことですか

A 常に目標や夢を持ち続け、チャンスを逃さない事です。新たな環境へ一歩踏み出す事は勇気がいりますが、チャンスを逃す事ほど後悔する事はありません。また、自分の信念・こだわりを持つ事、頑固にするというわけではなく、研究者として自分の信念を持ち、個性として生かす、という意味です。

Q 何故今の研究分野が面白く感じましたか

A まだ世に出ていない新薬候補の化合物が、どのように体に入って代謝され出て行くのか、他

の薬物や体内物質との相互関係はどうか、臨床での投与量はどの程度が適切か、といった薬物動態の研究に取り組んでいます。創薬の全体像を把握しながら、薬剤師としてではなく研究者として薬を通し患者さんに関わることが出来る、やり甲斐のある分野だと思います。

Q ワークライフバランスを実現していくために工夫・努力していることは？

A 結婚して4年が経ちますが、お互いの仕事の都合上、私はアメリカ、夫はイギリス・スイス・日本という別居婚を続けています。そのため、独身時代と変わらない生活をしているので、平日は仕事に集中、週末は脳が一つの事で凝り固まらないように、体も五感も使ってしっかりリフレッシュするようにしています。

Q ライフイベントとキャリアパスをどう考えていますか？

A 夫とは、お互いのキャリアパスを尊重した結果、今の生活をしています。一緒に暮らす事が次のステップ、『納得する仕事をしながら、且つ家族との時間を十分に持てる生活』を意識し、海外での生活を考えました。両両親の理解も大きいです。キャリアパスを考える上で、女性は妊娠・出産の前後は妊娠前のような仕事のアウトプットが出来ないことも自己認識しなければいけないと思います。常に変動するライフイベントと共に、キャリアパ

スも変化していきます。軸となる像を持ちながら、日頃からライフイベントを含めた具体的なキャリアパスのイメージを持つようにしておくと思います。

Q アメリカでの仕事を通じて得たことは？

A 研究所には様々な国籍の人が勤務しています。それぞれの文化や宗教・考えがあり、様々な多様性に触れ理解する事は、日本で仕事をしていては経験できなかった貴重な価値観です。渡米して、日本や自分自身について改めて考え直す機会ができたことも大きな財産の一つ。研究者として、薬を通し患者さんに関わる仕事をしている責任感を胸に、日米両方の長所を吸収した研究者として、これからも成長していきたいです。

Q アメリカの女性研究者の活躍について感じたことは？

A お子さんのいらっしゃる女性研究者や管理職は多いです。つまり、子育てをしながら働くとい

う環境が整っているからだと感じました。上司も同僚も、妊娠・出産・育児について理解がありサポートティブですし、家族との時間を大切に、パートナーと二人で家事も育児も分担する、という考えが背景としてあるから、女性もキャリアを考えやすいのだと思いました。ただし、女性だからといって差別はないですが、甘えもありません。皆さん仕事にも家庭にもパワフルです。

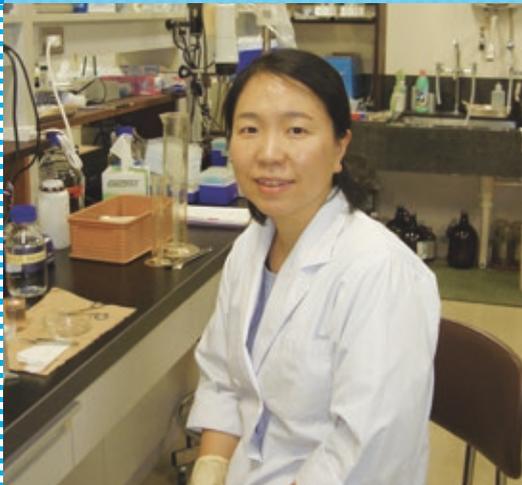
Q 研究者を目指す（後輩）女性へアドバイスをお願いします

A 3つあります。1つ目は、女性だからと諦めない事。自分の興味のあるものに貪欲に、常にチャレンジし、夢を追い続けて下さい。2つ目は、面白そうな事を見つけて、これだけは誰にも負けない、というあなたならではの強み(専門性)を身に付けて下さい。3つ目は、熱く語り合える永遠の心友やパートナーを作ってください。どれも、研究を続ける上で大きな糧となります。自分の感性を大事にし、自分の選択に自信を持って進んで下さい。

■ 経歴

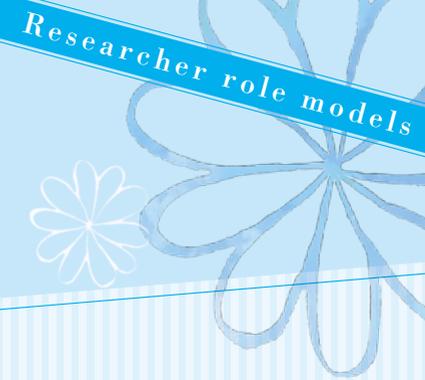
| | |
|--------------------------------------|---|
| 1998年3月 和歌山県立向陽高等学校環境科学科卒業 | 2005年4月 ファイザー株式会社名古屋研究所薬物動態研究部入社 |
| 2003年3月 武庫川女子大学薬学部生物薬学科卒業 | 2007年11月 Pfizer Inc. Global R&D Pharmacokinetics, Dynamics & Metabolism 入社 |
| 2005年3月 北海道大学大学院薬学研究所医療薬学専攻修士課程修了 | |

PROFILE



女性にしかない
発想力、機動
社会に貢献で

い
力、適応力で
きる「何か」を！



武庫川女子大学大学院 薬学研究科 薬学専攻 博士前期課程 修了
九州保健福祉大学 薬学部 准教授

鳥取部 直子

とりべ なおこ

Q 進路のきっかけは何ですか

A 大学在学中(3~4年生の頃)に「何かもう少しやり残したことがあるのではないかな?」「もっと自分で何かをやりたい」と思ったのがきっかけです。その頃はまだ何か新しいことを見つけ出したいとは思いませんでした。といいますか、思いつきませんでした。そこまでの手段が自分には備わっていないことは分かっていたので、大学院に進学することを選択しました。

Q 夢の実現に向かって努力したことはどんなことですか

A 夢を実現したとは思っていません。まだ夢を実現する途中段階です。研究者になることが夢だとするならば、その実現のために努力したことはありません。研究者が私の選んだ職業の一つだというただそれだけのことです。

Q 何故今の研究分野が面白いと思えましたか

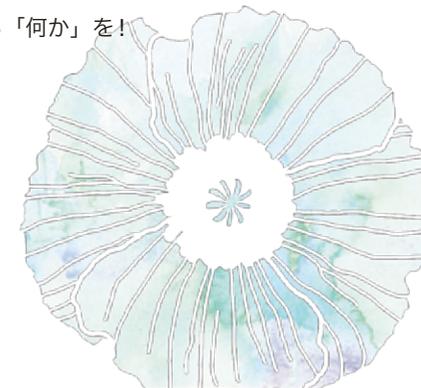
A 大学3年時の薬理学の講義内容が全く分からず、自分で必死になって勉強しました。勉強を進めるうちに、生体内にはこんなにたくさんの細胞があり、そこには数知れない酵素や細胞内小器官、情報伝達物質があることに驚き、さらにこれらを自由に制御できる「薬」の作用(薬理)はとても興味深いものだと思いました。現在は、冠動脈バイパス術後のバイパス血管が、長期にわたり開存出来るための薬物やターゲット因子を探索すべく、日々研究しています。



Q 研究者を目指す(後輩)女性へアドバイスをお願いします。

A 私は研究者でありながら、大学教員であり、妻であり、1児の母です。女性のライフワークの中で、妊娠・出産・育児は一大イベントではありますが、研究者においては、この期間による研究活動の萎縮は避けて通れない道です。しかしながら、研究の魅力である「新しい知見」に遭遇した時は、育児にない感動を与えてくれます。

女性であるがゆえに、自分の一生の中でいろんな感動がたくさん味わえます。女性にしかない発想力、機動力、適応力で「新しい何か」を見つけて下さい!社会に貢献できる「何か」を!



■ 経歴

平成9年3月
武庫川女子大学薬学部生物薬学科 卒業
平成11年3月
武庫川女子大学大学院薬学研究科薬学専攻博士前期課程修了(薬学修士)
平成11年4月~
武庫川女子大学薬学部助手として勤務(平成16年3月に博士(薬学)の学位を取得)
平成16年4月
九州保健福祉大学薬学部助手として勤務

平成19年4月
同学部 助教
平成19年7月
同学部 講師
平成24年4月
同学部 准教授(現在に至る)

現在は、九州保健福祉大学薬学部にて、生物学や薬理学に関する講義および実習を行っている。現在の研究テーマは、「冠動脈バイパス血管の長期開存を目指した薬理学的研究」で、本学近くの県立延岡病院心臓血管外科と共同研究を行っている。

PROFILE



文系・理系の 複合領域の研

究を目指して

武庫川女子大学 大学院 修士課程 修了
神戸松蔭女子学院大学 人間科学部 ファッション・ハウジングデザイン学科 教授

徳山 孝子 とくやま たかこ

Q 進路のきっかけは何ですか

A 武庫川女子大学家政学部被服学科では、衣料管理士1級と繊維製品品質管理士の資格取得を目指した。卒業研究は、被服心理の分野。先生のそばで研究の楽しさを知った。もう少し研究をしてみたくて大学院への進学を決意。当時は、就職するより結婚して家庭に入るのが一般的。先生からは、大学院へ行くことと結婚が遅くなる、考え直した方がよいと言われたが、進学。修士修了が目前に迫っているのに就職が決まっていなかった。その1月に当時の学科長麓泉先生から「助手に残らないか」と声が掛かった。助手は5年契約。契約だから、いつ辞めてもらっても構わないので引き受けて欲しいとのこと。故多田道太郎先生と森谷尅久先生の助手になったご縁が、今の私の原点になった。

Q 夢の実現に向かって努力したことはどんなことですか

A 先生方は、大学院後期課程を設置するために着任された。多田先生のご専門はフランス文学、日本文化、風俗学、森谷先生は歴史学

である。研究室は、今まで使用されていなかった甲子園会館。リフォームして本箱のみ備えてあった。二人の先生が持ってこられた約1000冊の書籍は、5つの部屋に収められた。先生が話される内容や人名、著書は、今まで聞いたことのない内容ばかりだった。まず著書や著者から覚えた。毎日新聞社阪神支局長から多田先生に「阪神間文化」の連載の依頼があった。連載を引き受ける条件は、助手を預けるので取材と記事が書けるようにして欲しいということ。勤務外は阪神支局へ行き、今までに経験したことのない世界、好奇心と楽しさで夢中だった。休日も返上し寝る暇もなく取材した。取材することで人脈が広がり、知識が増えた。先生の下で研究がしたいという思いが募った。その年の10月には、生活美学研究所が開設され、兼任助手になった。研究会の手配や紀要原稿の校正など担当し、毎日が超多忙。多田先生から「努力をしていれば名誉も金も男もすべてあとから付いてくるので勉強しなさい」と何気なく言われた言葉が、脳裏から離れなかった。学会発表、講演依頼、論文投稿、執筆依頼など4年間で経験したことは、20年間の蓄積に匹敵する。

Q 何故今の研究分野が面白いと思えましたか

A ある日、学科長・故稲垣博先生から一宮女子短期大学の専任講師の一般公募に応募してどうかと勧められた。多田先生も、5年契約で終わるよりは専任講師として研究者の道へ進むべきだと。先生のそばから離れる事は想像出来なかったが、周りの先生方からも脊中を押され助手生活を終了。その時に多田先生からは「大学で学んだ理系の知識と助手時代は文系の知識を持っているのは他の先生方にはない強みだから、今後は、理系と文系が融合する新たな学問を切り開きなさい」と助言をいただいた。当時、信州大学繊維学部感性工学科が開設。理系と文系が相互乗り入れする学問は“感性”という分野だと直感。学部長だった篠原昭先生のところに、今まで研究した論文を持っ

て行き説明した。研究が認められ、短大に勤務しながら感性工学科で研究することになった。国際学会に発表し、英語論文を作成した歳月は6年間。7年目に、研究した内容を博士論文にまとめた。その時には、理系、文系の両方の視点から研究内容を考えることができるようになっていた。助手になってから無我夢中で12年、やっと独り立ちができた研究の面白さをわかった気がした。現在は、文系では生活文化論、阪神デザイン論、ボディーファッション論、理系では色彩学、感性デザイン論など両方の科目を担当。卒論ではテーマによって学生に合った研究方法で指導している。今までの経験や知識を学生に教授できることの幸せとともに、さらなる研究意欲を貫いている。理系と文系の融合した新たな分野は、これからも追及していきます。

■ 経歴

武庫川女子大学大学院修士課程修了、信州大学大学院博士課程修了、博士(学術)。武庫川女子大学家政学部被服学科助手および生活美学研究所兼任助手、一宮女子短期大学専任講師、岐阜女子大学家政学部家政学科専任講師、神戸松蔭女

PROFILE

子学院大学人間科学部ファッション・ハウジングデザイン学科准教授を経て教授。現在に至る。繊維学会感性研究フォーラム研究会委員長、日本繊維機械学会企画委員など多数。

座談会

—理想のワークライフバランスと研究を目指して—

研究者たちとの座談会

この度、本学女性研究者支援センターから、ロールモデル集を出版することになりました。そこで本日は、学部学生にも目前で参考になるように、研究者を目指している若い方々の話し合いの機会を持ちました。ほぼ、以下の3つの視点からお話していただきました。

- 1 進路を選んだきっかけや研究を目指すことになった経緯、その際の問題は何だったか、また、それに向かってどのような努力をしたかについて
- 2 いまの研究分野に絞り込んだ理由、どのように面白と思ったか。それに向かってどのような試行錯誤があったのかについて
- 3 そのような経緯の中で、どのようなワークライフバランスが課題となったか、またワークライフバランスと進路や研究との兼ね合いをどう考えたのかについて

—まず自己紹介を兼ねて、研究を目指すことになった経緯などについて、お願いします。

草野桃子さん：進学のきっかけは、武庫女に進学して、知りたいことがいっぱい増えてきたことです。そのためには助手になりたいということで、相談したら大学院に行く方がよいということになったんです。授業を通じて楽しかったこともあります。実は、武庫女は受験ではずり止めで、家庭科の先生になるために受けました。入学してみると、他の大学にはないような知らない科目がいっぱいあって、授業を受けたところ、内容がとても面白かったんです。それでもっと知りたい、研究したいということになったんです。

池田仁美さん：大学を卒業してからそのまま5年間助手として勤め、その後、非常勤講師をさせて頂いています。非常勤講師として、より深く勉強し、学位を取得する必要があると考えるようになりました。非常勤の職を離れるか進学

するかで悩みましたが、博士課程への進学が可能かもしれないということが出てきて、入学させて頂きました。助手時代に、大学の紀要に掲載していた論文2本が認めていただけたんですね。当時、助手は研究職という感じはなく、学生のサポート係だったように思います。学位の取得もその時は考えていませんでした。現在の研究テーマは、助手時代の理系の内容から文系に変わりました。博士課程の入学時には、学位取得の目的が先立って、始めはテーマがしっかり固まらなかったのですが、今は研究内容への興味が強くなり、学会への投稿論文執筆を進めながら頑張っています。

博士課程の入学は結婚の半年後で、さらにD1の時に妊娠・出産がありました。休学もしましたが、今は娘も幼稚園の年少になり、少し自分の時間が持てるようになりました。

今村友美さん：私は別の大学出身で、大学院に行くのは当然のような雰囲気でした。実験に明け暮れているような状態でしたが、2年生くらい

でそのような実験がすぎにわたったんです。4回生で卒論の研究室に入った時には、研究は、3年計画で院に行くのが前提になっていました。修士課程修了の時に、栄養士の道もあつたのですが、企業も含め、研究の続けられる道を探りました。たまたま武庫女の求人があり助手に応募し、採用されました。助手の5年を終えても、研究職を続けたいという思いが強く、博士号がとりたいたと思うようになりました。



●進行役
女性研究者支援センター プロジェクト推進支援室長 横川 公子
●参加者
生活環境学部 食物栄養学科 講師 今村 友美
生活環境学研究科 生活環境学専攻 博士課程在籍 池田 仁美
生活環境学研究科 生活環境学専攻 博士課程在籍 白井詩沙香
生活環境学研究科 生活環境学専攻 修士課程在籍 草野 桃子

白井詩沙香さん：私は大学卒業後、IT企業に3年間勤務しました。業務を通し、ユーザインタフェースやシステムのユーザビリティに興味を持つようになり、大学院でさらに学びたいと考えようになりました。数式のユーザインタフェースの研究とその応用研究を行っている指導教員のもとで、研究生活をスタートしました。修士課程の2年間、先生と一緒に研究を進める中で研究の面白さを知り、博士課程に進学し、現在研究を続けています。

—今日は、複合領域の方々に集まっていたのですが、研究対象も方法も多彩だと思えます。研究をなさっていて、どういうところが面白いのかについて伺えますか？

草野：4年生のゼミの時から、ぬいぐるみの研究をはじめました。動物の中でも猿に絞りました。今は生活財としてのぬいぐるみを考えています。ぬいぐるみと人との関係性を、ぬいぐるみの一生と捉えて、フィールドワークでぬいぐるみを追っています。所持した時からのぬいぐるみの使い方が多彩で、びっくりしています。

ぬいぐるみの最後がどうなっているかも含めてですね、ぬいぐるみのないところはないんです。普通の店舗でも、この大学でもいろんな人が色々な場所で持っている。生活に密着しているんです。

研究については、リカちゃん人形については多いのですが、ぬいぐるみはほとんど取り上げられていません。大勢の人が触れているのに、ほとんど取り上げられていないからこそ研究していきたいと思ったし、そこが面白いと感じています。

池田：私は洋服づくりの文化史を調べるために、ミシンによる裁縫指導に関する研究をしています。明治末期にシンガーミシンが日本に入ってきましたが、日本人は和服を着ていた時代です。ミシンで和服を縫うとか、ミシンを如何に家庭



に普及させるかをシンガーミシン社は試行錯誤していました。洋服というものを知り、洋服をミシンで縫うことを教える裁縫学校を、まず東京に開設しました。当時、その学校で実際に学んだ人の関連資料が研究室に寄贈されていて、今、これを中心に調べています。昔のことを調べる面白さは、色々な資料が点在しているのを探し出し、それらをつなげてストーリーに仕上げていくところにあると気づいたんです。新聞や雑誌の記事、書籍などに個々に登場する人物が、ミシンの家庭への普及という筋道でつながり、生き生きと見えてくる。そこに研究の魅力を感じています。

今村：初めの研究分野は食品学でした。食品の機能性について、免疫との関連性ということから証明する。抗酸化物質を摂取して、アレルギーを抑制できるかを細胞レベルで実験していました。アレルギー抑制が食品中の成分で可能だということを知りました。武庫女では、解剖生理学の研究室に来たのですが、やりたいことをさせていただいた。それまでの私のスキルと武庫女でお世話になっている（解剖生理の）先生が培ってきたノウハウの両方を生かして運動と酸化・抗酸化との関係を研究しました。修士

の研究でやっていた細胞実験は比較的簡単にデータがでますが、・・・動物では難しく、運動に関する研究を始めたことで、運動に関する知識を深めたくて、せっかくなので、健康運動指導士の資格をとってしまえと思って勉強しました。その時に身につけた知識が博士論文に結びつきました。

今は運動と栄養に関する研究へと関心が移っています。今度は研究対象が人ですが、人は社会的な生物なので、食文化も影響するし、いろいろな複合的な不確定な要素との関連があります。・・・スポーツ種目との関係、一人暮らしの人、等々いろいろなことを考えなくては、・・・苦戦しています。ラボの実験に比べて、人はいろいろな情報が関わるので判断するのが難しい・・・。そして、女性研究者支援センターの企画「若手研究者の集い」に参加したのがきっかけで、他学科の方と交流ができ、さらに研究の幅が広がりそうです。

白井：修士課程では数式入力ユーザインタフェース開発の知見を得ることを目的に特殊記号を含めたキーボードの特性調査を行いました。博士課程の現在は、数学eラーニングシステムとそこで使用する数式入力インタフェースの研究を行っています。数学が苦手な中高生が楽しく数学の基礎知識を学べるようなシステムを目標に、ユーザインタフェースやシステムのユーザビリティ、コンテンツなど様々な角度からシステムを検討し、開発を行っています。開発したシステムを実際に中学生に使っていただき、楽しんで学習している様子を見たとき、研究を続けてきてよかったと思いました。また、想定外の使い方や意見を聞かせてもらった時は、とても新鮮で面白く感じました。

草野：附属幼稚園で、ぬいぐるみを持って行って子供たちに遊んでもらったんです。観察して

いて、遊び方が思いがけないことが出てきた。想定外の使い方ができて、すごく面白いんです。

——みなさん興味を持って、楽しんで研究を進めておられるようですね。それでは次に、大学院進学の際に、ワークライフバランスのクリアの仕方はいかがでしたか？進学するかどうかの判断ではどういうことを考えたのか、家庭の方のご意見との齟齬がなかったのかどうかなどについて、伺いたいのですが・・・。

草野：友達には誰にも言っていなかった。ちょうど就活が始まったころに思い切って親に明かしたところ、「そう思うと思っていた」といわれたので、それまでの様子を見てくれていたんだと思いました。でも回りに進学する人が少なかったため、みんなの就職の決まってくる中で何となく焦りがありました。修士になって、今また進路についての焦りはあります。就職のラストチャンスかも知れないというような、ですね。助手になりたいとしても、必ずしもそうなるか保障されない。研究もしたいけど就活もしなければという思いがあって、中途半端です。家の方は、大学院に行くなら博士を取る勢いでやるようにといってくれたので、自分も博士に進学したいけど、それから企業に就職するのは考えにくいように思うんです。助手をしながら博士を取るための研究をということもあり得るし、悩んでいます。

——いろいろな行き方や可能性があるのではないのでしょうか。パターンに当てはまらなくともいいのではないのでしょうか？

池田：私の場合は、大学院の進学を決めたのが結婚後でしたから、学費をどうするかがまず問題になりました。学費は助手時代の貯蓄で賄い、

家計に影響しないということで進学できました。さらにD2で出産。学費に加えて託児料も貯蓄から賄うことになりました。家庭、育児、非常勤、さらに研究も、というわけで、どれも中途半端になってしまっている気がします。今抱える問題としては、院生と暮らしているという状況を夫にあまり理解してもらえていないことがあります。夫は、家はくつろぐ場所という認識で、土・日も家族で過ごしたい。でも私は、家でも勉強する必要があり、時間があればなるべくPCに向かいたい。むしろ、土曜日だけでも家事・育児を任せて研究に没頭したい。平行線ですね。学会発表の前など、どうしても家庭より研究に比重をおかねばならないときは、その都度、夫にも応援してもらい、必要に応じて対応してきています。今のところ、家庭を犠牲にし過ぎないバランスにはなっているように思いますが、どうでしょうね。



今村：両親は、院進学を期待していました。修士の延長でそのまま博士に進学すると思っていた。でも私は社会人になりたかったし、自立したい思いも強かった。指導教官の先生も勧めてくれていたし、研究も続けたかったんですね。そんなとき、たまたま武庫女に就職ができて研究ができることになったんです。5年で助手の任期が切れた時、親は援助をしてくれるといたんですが、自分は貯金を切り崩しながらやり始

め、幸いなことに臨時職員として武庫女で働くことができたので、仕事が終わると研究室に直行する形で研究を続けられました。一人暮らしなので、博士論文も実験も、時間的制約と経済的な問題も含めて大変でした。

白井：私も両親の反対はありませんでした。今は実家からの通学で、研究に専念できるため感謝しています。将来、女性研究者として結婚や育児などの問題が出てくると思うので、女性研究者支援の様々な施策に期待しています。研究費の面では、女性研究者支援センター主催の助成金セミナーで、研究者スタートアップ支援など様々な助成制度があることを知りました。今後挑戦していければと思っています。

いろいろなチャンスにチャレンジしてほしいですね。資金的には企業からの助成もあるし、どんどんチャレンジしてほしい。・・・共同体制が組みやすいのも、理系の強みだと思います。勿論、文系も共同体制が可能だと思います。学会活動に参加して、仲間づくりも必要でしょうし、そういう中で研究の突破口や就職の情報に遭遇することもあるでしょう。学会活動の雑用も仕事も覚えていく、参加もしていく・・・それが研究活動にとっても重要だと思います。

—それでは最後に、後に続く学部生や院生へのメッセージを一言ずつ、いかがですか？

草野：大学院=研究職というように考えるように思うのですが、必ずしも院=研究職のみでないと思います。修士で就職も結構ある。企業に行く人も院で勉強するのはいいと思います。でもキャリアセンターのOB情報にあまり出てこないのも、もっと情報があるといいですね。

池田：女性としてワークライフバランスは避けては通れないと思います。うまくやろうとするよりも、その時にできることを一生懸命やっていたら、自然にバランスがとれてくるように思います。それと私の所属する研究室では、他の大学から大学院へ来ている人も多く、いろいろなことが聞けるし、視野が広がると思います。

今村：研究を通して世界とつながることを肌で感じることができるんです。若い学生さんたちも感じてほしい。そして、助手時代の仲間たちの中には、泣く泣くやめている人もいます。そういう人が戻ってこれないものかと思っています。共同研究者としても戻ってほしい。

白井：少しでも大学院に興味を持った学部生は、ぜひ院生に声をかけ、大学院生活について、また研究活動について生の声を聞いてほしいと思います。興味を持ち、チャンスがあれば、ぜひ挑戦してもらいたいです。

—男性との関係では、伍してというより、難しいけれど女性の視点を出せることが重要だと思うし、JSTの趣旨のみならず、社会的にもそういうことが認知されてきていると思います。

本日は若手研究者の現場からの頼もしい研究への情熱や、一方で将来への期待と不安も聞かせていただきました。いろいろな可能性があることも共有できたと思います。皆さんの頑張りが、研究者に挑戦する後進の方たちの増加につながることを期待したいと思います。

長い間ありがとうございました。

女性研究者研究活動支援事業 選定機関一覧（女子大学）

| 採択年度 | 大学名 | テーマ |
|--------|----------------|---|
| 平成18年度 | 国立大学法人お茶の水女子大学 | 女性研究者に適合した雇用環境モデルの構築 |
| | 国立大学法人奈良女子大学 | 生涯にわたる女性研究者共助システムの構築 |
| | 東京女子医科大学 | 保育とワークシェアによる女性医学研究者支援 |
| | 日本女子大学 | 女性研究者マルチキャリアパス支援モデル |
| 平成20年度 | 津田塾大学 | 世代連携・理文融合による女性研究者支援 |
| 平成24年度 | 東京女子大学 | 21世紀男女共同参画社会の担い手としての女性研究者を育成する女子大学 |
| | 武庫川女子大学 | 若手女性研究者の自立と国際化を軸とした女性研究者支援のモデル開発 |
| 平成25年度 | 福岡女子大学 | 「女性リーダーとして活躍する女性研究者の育成」を達成するために (1) 教育・研究・大学運営を牽引する女性研究者の育成 (2) 女性研究者の裾野拡大(次代の女性研究者の育成) |

「女性研究者研究活動支援事業」とは

女性研究者が働きやすい環境づくりを目指し、育児・介護期間中の研究活動を支える取組への支援、円滑に研究現場に復帰できるようにするための取組への支援をするものです。

女性研究者支援センターの取り組み概要

「若手研究者の自立と国際化を軸とした女性研究者支援のモデル開発」

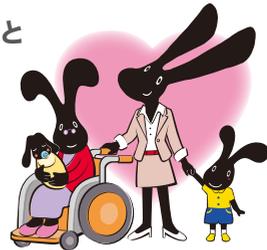
4
つの

取 り 組 み

育児・介護支援部門

ライフイベントへの不安解消と
研究活動継続への支援

- ◆ 育児・介護相談窓口
- ◆ 情報や知識の供給
(セミナーの開催)
- ◆ 代替講義制度の実施



調査・広報部門

意識改革の推進と女性研究者の
採用・登用の活性化

- ◆ 意識啓発セミナーの開催
- ◆ 新たな支援システム情報の収集
- ◆ ニュースレターの発行
- ◆ 広報体制の強化



国際化支援部門

国際的に活躍できる
女性研究者の育成

- ◆ 英語プレゼンテーションに関する支援
- ◆ アメリカの女性研究者との交流
- ◆ 海外の女性研究者に関する情報収集
- ◆ 海外留学情報の提供

アメリカ分校
(MFWI)
1990年開校

キャリア支援部門

キャリアパス設計と若手女性研究者の
スタートアップ支援

- ◆ 研究支援員の配置
- ◆ キャリア相談、研究職の就職相談
- ◆ 女性研究者交流サロンを設置し、
研究情報やライフイベントの情報交換
- ◆ 論文、国際学会発表、
 Grant申請の書き方などの指導

女性研究者
ネットワーク



- P**urpose
- 1 環境・制度の整備による女性研究者の離職者の削減
 - 2 女性研究者の採用の増加
 - 3 女性研究者自身の意識改革
 - 4 若手女性研究者の早期自立の支援
 - 5 国際的に活躍できる女性研究者の育成